

ステージラボ八戸セッション 募集要領

ステージラボは、地域の文化・芸術に携わる公共ホール・劇場等並びに地方公共団体の職員の方々を対象とした研修プログラムです。少人数のゼミ形式によるセミナー、グループ討論、ワークショップなど双方向の研修で、地域における創造的な表現活動の環境づくりに取り組む人材の育成と、相互交流の促進を目指して実施します。

■ 開催概要

日 程：2024年7月2日（火）～7月5日（金）[4日間]

会 場：八戸ポータルミュージアムはっち（青森県八戸市三日町11-1）
八戸市美術館（青森県八戸市大字番町10-4）

開講コース：①ホール入門コース、②自主事業コース

定 員：各コース20名程度

参 加 費：研修参加は無料 ※交通、宿泊、滞在中の食事はご自身で手配、費用負担いただきます。

開 催 体 制：主催／（一財）地域創造 共催／八戸市 後援／青森県

①ホール入門コース

コーディネーター：大澤 寅雄（合同会社文化commons研究所 代表・主任研究員）

公共ホールには様々な顔があります。公演のための集客施設、講演会や会議のための集会施設、表現や創作などの活動拠点、学び、教え、出会い、憩いの場、開かれた居場所。それらの顔の「表情」がホールの魅力であり、表情を作るのがホールの職員です。この4日間、参加者の皆さんが互いに顔を見ながら、あるいは自分の顔を鏡に映して、地域住民に見せる、あなた自身の表情、あなたのホールの表情を作りましょう。

[対象となる職員の目安]

公立文化施設（ホール・劇場等）で企画・運営に携わる職員（指定管理者である民間事業者の職員も含む）および地域の文化・芸術に携わる地方公共団体職員で、公共ホール・劇場（開館準備のための組織を含む）において業務経験年数1年半未満（開館準備のための組織は年数不問）の方。

②自主事業コース

コーディネーター：田村 一行（大駱駝艦舞踏手・振付家）

今日まで様々な場所で地域の資源を活用しながら30以上の作品を創作してきました。各ホールの状況・環境・形態・問題は一つとして同じものではなく、「こうすれば良い」というメソッドはありません。しかしだからこそ外せない重要なポイントが見えてくるのです。今日まで私が作品創作を行なう中でのポイントとは何であったのかを振り返り、また実際に市民参加作品等の事業を継続している劇場の例を検証しながら、そこから見える自身のホールとの類似点・相違点を探りましょう。「地域とアーティストが作品を創作する」という事業を実施するためには何が必要か、またその未来について考察します。

[対象となる職員の目安]

公立文化施設（ホール・劇場等）で企画・運営に携わる職員（指定管理者である民間事業者の職員も含む）および地域の文化・芸術に携わる地方公共団体職員で、自主企画による事業を実施している公共ホール・劇場において業務経験年数が2～3年程度の方。

■ 申込方法

当財団ウェブサイト「研修事業」→「ステージラボ」(<https://www.jafra.or.jp/project/training/01.html>)から、①参加申込書、②アンケート回答票 をダウンロードし、必要事項をご記入のうえ、メール（宛先：kensyu@jafra.or.jp）でお申し込みください。

※民間事業者の場合は③副申書が別途必要

申込締切：4月25日（木）必着

※申し込まれた方には、2営業日以内に受付確認メールをお送りいたします。確認メールが届かない場合は、お電話でお問い合わせください。

【参加者の決定】

アンケート内容、応募状況などを考慮のうえ（アンケート重視）、参加コースと参加の可否の調整を行い、6月上旬頃に、申込者あて文書によりご連絡致します。

お問合せ：（一財）地域創造 芸術環境部 研修担当 TEL03-5573-4183 E-mail kensyu@jafra.or.jp

コーディネーターからのメッセージ・プロフィール

①ホール入門コース

コーディネーター：大澤 寅雄（合同会社文化コモンズ研究所 代表・主任研究員）

1994年、慶應義塾大学卒業後、株式会社シアターワークショップにて公共ホール・劇場の管理運営計画や開館準備業務に携わる。2003年、文化庁新進芸術家海外留学制度により、アメリカ・シアトル近郊で劇場運営の研修を行う。帰国後、NPO法人STスポット横浜の理事および事務局長、東京大学文化資源学公開講座「市民社会再生」運営委員、株式会社ニッセイ基礎研究所芸術文化プロジェクト室主任研究員を経て23年6月に文化コモンズ研究所代表・主任研究員に就任。NPO法人アートNPOリンク理事長、NPO法人子ども文化地域コーディネーター協会専務理事、日本文化政策学会理事、九州大学社会包摂デザイン・イニシアチブのアドバイザー、堺アーツカウンシル プログラム・オフィサー。



私が大学を卒業した年は地域創造が設立された年でもあり、数多くの公共ホールが全国各地に整備されていた時期でした。その頃（なんと30年前！）の公共ホールに求められていた人材の経験や資質は、現在と変わらない部分と、大きく変わった部分があります。おそらく受講される皆さんが勤務するホールが置かれている環境も、地域から求められる役割も、開館した頃と現在とで、変わらない部分と変わった部分があると思います。勤務するホールが開館して間もない場合でも、この先を考えると同じことが言えます。博物学者のダーウィンは「生き残る種とは、最も強いものではない。最も知的なものでもない。それは、変化に最もよく適応したものである」という言葉を残しました。環境の変化に適応し、生き残ることができる公共ホールとは？ という言い方をすると少し気が重くなりますが、きっと、みなさん自身が身を置いている環境の中で、生き生きと楽しく仕事をするのが、結果として生き残っていくことになると思います。楽しく一緒に学びましょう。

②自主事業コース

コーディネーター：田村 一行（大駱駝艦舞踏手・振付家）

日本大学芸術学部卒。1998年大駱駝艦入艦、磨赤兒に師事。以降大駱駝艦全作品に出演。2002年『雑踏のリベルタン』を発表。同作品により第34回舞踊批評家協会新人賞受賞。08年、文化庁新進芸術家海外留学制度によりフランスへ留学。22年『舞踏 天狗藝術論』を発表。同作品により令和4年度（第73回）芸術選奨舞踊部門文部科学大臣新人賞受賞。地域の文化や風土を題材とした作品の創作にも意欲的に挑み、独自の作品を発表し続けている。また、子供から高齢者まで幅広い対象者への舞踏ワークショップ・アウトリーチを各地で展開し、好評を得ている。11年度から22年度まで（一財）地域創造「公共ホール現代ダンス活性化事業」登録アーティストとして活動。



©小林直博

新しい風景を見るためにまず必要なものは、“新しい風景”ではなく“新しい目”です。いつもと同じ景色をいつもと違う気持ちで見渡してみる。すると、いつもの出来事は新しい価値を持ち始めるかも知れません。樹齢3000年の杉の大木から手の平ほどの仏像を彫りましょう。果てしなく広がる赤土の荒野で一食分の小麦を育てましょう。私の町には何があり、私の劇場では何ができるのか。私の町にはどんな人がいて、何を求めて暮らしているのか。私は隣人に何を届け、これから生まれてくる子どもにどんな景色を見せたいのか。地域の方々とアーティストが共に作品を創作するにあたり、何をどこから企み、誰と何を出会わせるか。この時皆さんは観客とアーティストを異世界へと誘う案内人となるのです。そうして作品がもたらすもの、その先に繋がっていく地域への影響・効果を考察した上で、さらに事業を継続するためには、見えるものも見えないものも含めて何が必要か、そしてそれは今後どのような可能性を孕んでいるのかを皆さんと共に探っていきたいです。皆さんが町の人たちと共に手に入れた“新しい目”は、地域の文化活動の発展と促進に必ずや大きな影響を与えるものと考えています。